

Title	(海外報告)近代デザインの足跡を尋ねて
Author(s)	藪, 亨
Citation	デザイン理論. 1981, 20, p. 122-123
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52693
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

(海外報告)

近代デザインの足跡を尋ねて

藪

亨

今春、近代デザインの足跡を尋ねたいとの思いに駆られ、私は一人で旅立ちました。そして、約三週間、パリを振り出しにアムステルダムを経てドイツの諸都市をまわりウィーンに至るまで、鉄道を乗り継ぎながら中部ヨーロッパを廻したのです。その時のご報告を僭越ながらさせていただきたいと思います。

まず、パリでは、ポンピドゥ・センターがその超現代的な建築物に呼応するかのようデザイン展示に力を入れており、スライドを用いてデザインの歴史を解説するコーナーには多くの人々が集まり熱心に耳を傾けていました。とはいえ、センター前の広場で連日繰り広げられる騒々しくもエネルギー溢れる大道芸人のお祭騒ぎに圧倒されがちであったようにも思われます。そして、近代デザインに関する限りパリよりもドイツの各都市が、それぞれの独自性を前面に出した興味深い美術館を持っていました。ことにハンブルクの装飾美術館は、アーツ・アンド・クラフツ運動からユエグントシュティルにかけての収集品において他を抜きん出ております。他ではニュルンベルクのゲルマン国立美術館が、当地の産業デザインの指導に功績を残したペーター・バーレンスの作品を中心にして近代デザインに一室をあてていたのが目を引きました。しかし、特に近代デザインの事象に焦点を合わせて次々とユニークな企画展を行っている新しいタイプの美術館が、ミュンヘンにあります。これは、国立応用美術館ディ・ノイエ・ザムルングです。今春には、世紀の転換期から現代にいたるまでの商品ポスターおよびパッケージ類の展覧によって、グラフィックなデザ

イン・イメージの近代における変遷を見事にとらえていました。ディ・ノイエ・ザムルグは、デザイン事象に関心を抱くわたしたちにとって今後もっとも注目すべき美術館のひとつであると思われます。またベルリンでは、グロピウスの晩年の作品であるパウハウス・アルヒーフの清らかな簡潔さに感銘をうけるとともに、その内部の充実した展示物を前にして時のたつのを忘れました。それに比べて、同じようにベルリンにありながらもドイツ工作連盟アルヒーフの体裁と内容の双方における立ち後れには、今さらながら奇異な感じを受けました。しかし、休館中にもかかわらず、資料の閲覧を申し出ますと、快よく迎え入れられたのです。工作連盟アルヒーフ内には、多くの資料類や物品が雑然と山積されており、今後の整理・研究を待ちわびているかのようでした。

さて次に、現在その跡をとどめているドイツの近代運動の成果について少し触れたいと思います。まずダルムシュタットの芸術家村の華やかな美しさに強烈な印象を受けました。折よく初夏のような快晴に恵まれ、紺青の空を背にして立ちそびえるユーゲントシュティルの個性的な建築群は、当時の人々の美的生活への尽きない憧れを今なお詩情豊かに語りかけるのでした。これとは対照的に、シュトゥットガルトのヴァイセンホーフジードルングは、デザインにおける力点が装飾美からザッハリヒカイトへと転じたことを如実に示めております。これらの実験的な集合住宅は、今日の切りつめられた一般的住空間の原型ともいえるのですが、ダルムシュタットの自然と調和して悠然と立つ住宅群に比べて、あまりにも性急でゆとりがないとの思いを押えることができませんでした。

こうして各種の美術館の中に展示された近代デザインの物品を目前に見たとき、また今なお毎日の暮らしの中に生かされながらもすでに過去の遺物のように扱われる近代建築群の傍らに立ったとき、近代デザインがわたしたちにとってすでに歴史的対象となり、その意味が問い直されていることを、あらためて実感いたしました。